

る植物を減らし、極端な乾燥を防いでくれる居心地の良い環境なのです。

この頃、ホンシュウカヤネズミの巣を目にすることが多くなります。また、コムラサキ・ゴマダラチョウ・サトキマダラヒカゲ・キタテハなどの蝶類や、カナブン・カブトムシ・コクワガタ・ノコギリクワガタなどの甲虫類にキイロスズメバチが加わって、クヌギの樹液の争奪戦が展開されます。アカテガニの姿も雨上りなどに見ることがあります。

ところで、大正9年の写真を見ると、指定地にはほとんど樹木はありません。現在は指定地の囲欄に沿って多くの樹木が植えられています。最近では、これらの樹木の種子や鳥類が運んできた種子が、次々に発芽して若木に育っています。このまま放置すると周もなく指定地の草原は樹林に変化してしまいます。そこで、夏のこの時期は若木の除去を行います。トベラ・マルバシャリンバイ・ヤマグワ・オニグルミ・ムクノキ・ケヤキ・エノキ・アケビ・キズタ・シロダモ・トウネズミモチなど、除去する樹木の種類も量も多いのです。

この他に、観察路を塞ぐように生い茂った植物の刈り払いを行い、路傍の植物の生育を促すとともに、見学者が通りやすいようにしています。

9月～10月 指定地は秋草の最盛期になり、コバギボウシ・ヤブラン・センニンソウ・シロバナサクラタデ・サクラタデ・キンミズヒキ・ツルフジバカマ・ヤブツルアズキ・アキノウナギツカミ・イヌゴマ・スズメウリ・タカサブロウ・ユウガギク・カントウヨメナ・タカアザミ・フジバカマなどの花が咲き乱れ、オギやヨシに穂が出ます。

オオバタクサやセイタカアワダチソウは花が咲いて見付けやすくなり、除去する良い機会です。この2種は、この時期に取り残すと、種子を散布し、さらにセイタカアワダチソウは地下に繁殖芽をつくるので、特に念入りな除去作業を行います。種子によっては地中に埋もれて、10年近くも生きて発芽を待つそうです。

11月～12月 秋も深まると指定地は枯れ野となります。かつては、枯れたオギやヨシは刈り取られて茅葺き屋根(かやぶきやね)や葦簀(よしず)の材料として利用されていました。そのため、毎年サクラソウの生育する時期に地表に陽光が当り、また、若木も一緒に刈り払われたので、樹林への変化もなく、サクラソウの生育に適した環境が作りだされていたのです。ところが、近年になるとオギやヨシを利用することはなくなりました。しかし指定地をサクラソウの自生地として維持するためには、どうしても枯れたオギ

やヨシを除去しなければなりません。そこで、簡便な方法として野焼きをすることにしました。ところが、野焼きはダイオキシンを発生させるということで、こ



⑥ 刈り払いの様子

こ数年は刈り払って焼却場まで運び出しています。刈り払いが終わるのは年明けになります。(写真 ⑥)

2月 ノウルシやサクラソウの芽が地表に姿を見せます。イヌムギ・ネズミムギ・タネツケバナ・ナズナ・ムラサキケマン・クサノオウ・オヤブシラミ・スイバ・ノダイオウなど、越冬した植物の緑葉が目につくようになります。葉を広げて越冬する植物が、秋に刈り払いをするようになってから増えています。

(さいたま市教育委員会)

サクラソウの自生地を尋ねて(1頁の続き)

サクラソウの自生する湿地を見渡すと、東側には小規模な牧草地や雑木林があって、その先に深い沢が南北方向に流れ、南側には農業道路を経て牧草地が、西から北には広々とした水田が続くといった具合で、農地の間に残された貴重な場所であることが一見して分かりました。湿地は水田のある西から北側が高くなっていて、水田からの排水路が幾筋も湿地を横切り、南側の農業道路の側溝に届いていました。(写真 ⑦)

サクラソウの生育している状態を観察すると、湿地にくまなく生育しているのではなく、排水路に沿って帯状に分布していることがわかりました。また、排水路の縁や水量が多い時に水路となるような窪地に、サクラソウの種子の芽生えがたくさん見られました。(写真 ⑧、⑨)

ここで、那須野ヶ原のサクラソウ自生地と田島ヶ原のサクラソウ自生地を比べるために、生育していた植物を調べて、表にしてみました。(表)

表から最初に気付いたことは、サクラソウの花が満開になる時期が那須野ヶ原では田島ヶ原より3週間も遅いことです。サクラソウの開花は気温と密接に関係(正確に

表 サクラソウ群落と出現する植物の状況

田島ヶ原('00.4.17調査)			那須野ヶ原('00.5.9調査)		
出現植物	被度	高さ	出現植物	被度	高さ
サクラソウ	34%	14cm 花期	サクラソウ	24%	17cm 花期
オギ	29%	17cm	サクラソウ(幼苗)	1%	0.5cm
アマナ	16%	7cm	ツリガネニンジン	23%	11cm
ノウルシ	2%	17cm 花期	オギ	13%	30cm
ノカラマツ	2%	7cm	ハルカラマツ	9%	24cm
ヤエムグラ	2%	3cm	フレモコウ	7%	10cm
スギナ	1%	17cm	チダケサシ	3%	10cm
ヨシ	1%	15cm	ノダケ	3%	8cm
ヤブガラシ	+	5cm	ヨモギ	3%	4cm
			ミツバツチグリ	2%	4cm 花期
			アキノタムラソウ	2%	4cm
			スギナ	1%	13cm
			キヌタソウ	+	11cm
			ヒメシダ	+	5cm

備考
調査面積は1m²の区画です。
被度は出現した植物が、調査した区画の中を占める割合を%で示したものです。
+は割合が1%未満の場合です。

は出芽後の積算温度と関係)していません。那須野ヶ原は田島ヶ原より北方にあって、しかも標高が高く、さらに、近くにある雪を頂く那須連峰からの冷気が降りてくることなどによって、気温の低いことがサ



⑦ 湿原の水路沿いに生育するサクラソウ (那須野ヶ原, 2000.5.9)

クラソウの満開の時期を遅くするのだと思います。標高だけを考えても、田島ヶ原の標高は約5mで那須野ヶ原の方は約500mです。気温は100m高くなるごとに0.6℃ずつ低くなる訳ですから、那須野ヶ原の気温は田島ヶ原より3℃も低いことになります。



⑧ 水路となる窪地のサクラソウの幼苗 (那須野ヶ原, 2000.5.9)

って、次代のサクラソウが育たないため、現在見られるサクラソウが老化して枯れてなくなれば、絶滅すると心配されています。那須野ヶ原で次代のサクラソウとなる幼苗が育つのは、自生地が湿地で、しかも湿地の中に数本の水路があって極端に乾燥することがなく、サクラソウの繁殖に適した環境が保たれているからと考えられます。

3番目に気付いたことは、サクラソウと一緒に生える植物が、田島ヶ原と那須野ヶ原とで共通しているのはオギとスギナだけで、その他の植物は共通していないことです。オギやスギナは酸性の土地に生育する植物ですから、田島ヶ原も那須野ヶ原も酸性の土地ということで共通していることとなります。また、オギは初夏から秋にかけて繁茂する大型植物なので、繁茂すると下が暗くなって生育できる植物は少なくなり、サクラソウの競争植物も少なくなります。そして、秋から早春の間に人手が加わってオギの刈り払いや焼き払いが行われると、サクラソウの出芽、生育、開花の期間に日当たりがよくなります。このように、オギ群落はサクラソウの生育に有利に働くことが知られています。つまり、オギが生え、そのオギを秋から早春に人手で取り除く土地は、サクラソウにとって居心地がよい訳です。那須野ヶ原では、この湿地にオギが繁茂し、それを土地の所有者が採草地として利用していることが、結果としてサクラソウの生育を助けているわけです。なお、同じオギ群落であっても、その群落を構成する植物にはその土地に生育する植物が加わるので、田島ヶ原のオギ群落には荒川低地に生育する植物が含まれ、那須野ヶ原のオギ群落には那須高原に生育する植物が含まれるために、共通する植物が少ないこととなります。つまり、田島ヶ原のサクラソウは荒川低地の植物で構成さ

2番目に気付いたことは、那須野ヶ原ではサクラソウの幼苗が見られることです。田島ヶ原ではサクラソウの種子はたくさんできますが、土地が乾燥するので種子が発芽して幼苗にまで育つことが難しいのです。したが

れるオギ群落の中で生育し、那須野ヶ原のサクラソウは那須高原の植物で構成されているオギ群落の中で生育しているという、それぞれの特徴が示されていることなのです。

こうして田島ヶ原と那須野ヶ原のサクラソウ自生地を比べてみると、共通点も多いのですが、また異なったことも多く、環境や植生のようなところが違っていることに気がきます。しっかりと観察するとサクラソウが生育するのに適した条件が見えてくる筈です。その条件を見つけてサクラソウ自生地の保護保全のために活用できれば素晴らしいことだと思います。

最後に、この日のサクラソウの訪花昆虫調査をまとめて紹介します。天候は晴天、気温は10時に21℃、12時に23.5℃、15時に22℃を記録し、風速1~4mの北西の風が常時吹いて、この時期としては温暖で穏やかな一日でした。湿原に開花していた植物はショウジョウバカマ、ミツバツチグリ、ヘビイチゴ、ツボスミレ、ノジスミレ、オランダガラシ、タネツケバナ、スカシタゴボウ、セイヨウアブラナ、イヌナズナ、ウシハコベ、ノミノフスマ、オランダミミナグサ、ウマノアシガタ、ネコノメソウ、ハルリンドウ、サクラソウ、カキドオシ、トキワハゼ、ムラサキサギゴケ、タチイヌノフグリ、ハルジョオン、エゾタンポポ、セイヨウタンポポなどで、特にサクラソウとミツバツチグリの花が多数みられました。調査は10時から15時まで継続して行いましたが、午前中はサクラソウに飛来した昆虫は全く見当たりませんでした。午後になっても同じ状況が続いていたのですが、14時30分になったときからにわかにモンキチョウとアゲハチョウが点在するサクラソウ群落の間に入り込むようになりました。その姿を追跡した結果、モンキチョウの雄2頭と雌2頭がサクラソウの花に止まって吻(フナー口器)を伸ばし、花筒に差し込んで吸蜜しているのを目撃することができました。アゲハチョウの雄1頭がサクラソウの花に止まり、吸蜜しているようにみえたのですが、近付いたとたんに



⑨ 調査のため1mの方形枠で囲んだサクラソウ群落 (那須野ヶ原, 2000.5.9)

飛び立ってしまい、吸蜜していることは確認できませんでした。湿原には大きなサクラソウ群落が点在しているので、吸蜜していても確認できなかった個体がいたはずなのですが、何しろ近付くと直ぐ飛び立つし、1頭が1個の花から吸蜜する時間は数十秒の短さで、全体の吸蜜のようすを知ることは大変難しいのです。

(さいたま市文化財調査専門員)